

一学童期における年令別味覚の相違一

聖徳大短大部

○伊藤輝子・松浦慎治

目的 食物に対する味覚は、人間の総合的な感覚を主体にした分野である。また最近の日本の食生活の変化に伴い子供達の味覚の変化が予想される。そこで人の感覚による官能検査法を用い、学童期の小学1年生から6年生に対して味覚調査を行い、各学年間に差が見られるか否かを明らかにすることを目的として本研究を行なった。

方法 松戸市の小学生男子89人、女子214人を対象にして、4基本味の官能検査を行なった。濃度は塩味：0.7、0.9、1.1%（水溶液）、甘味：8、10、12%（水溶液）、酸味：0.1、0.3、0.5%（0.8%食塩水溶液）、酸味：4、8、12%（1%食塩、10%砂糖混合水溶液）とした。同時に味に対する嗜好調査を質問形式でおこなった。解析、検定はケンドールの一致性の係数（W）、正解率により年令別の各味覚に対する一致性、T検定、検定により4味に対する男女差の検定をおこなった。

結果 甘味、酸味、旨味のWは各々1年0.01、0.11、0.04、4年0.02、0.08、0.14、5年0.38、0.20、0.41、6年0.37、0.44、0.49（何れも女子）であり、5年生から急に一致性が高くなる。塩味のWは1年0.01、2年0.32、6年0.50であり2年生あたりからかなり一致性がみられる。正解率は甘味、酸味ではWと同様な傾向にあるが旨味、塩味では異なったパターンを示した。味に対する嗜好調査では好きな味を塩味と挙げたのが男子31.5%にたいし女子17.8%、嫌いな味に酸味を挙げたのが男子43.8%、女子28.5%、塩味を挙げたのが男子37.7%女子52.3%で男女に差がみられた。